

## エートスと国際ロビーヴラディーミル・チェルトコフ

(参院院内集会)

エートスとチェルトコフ

エートスとチェルトコフ

2008年6月、私は南仏エクサンプロバンス近郊にある国立消防士官学校で1週間を過ごしました。それは、映画「サクリフィス」と「真実はどこに」の上映と講演会のためでした。私が扱うテーマは、「放射線のリスクと原子力、危険防止と危機管理」でした。私は、フランスの消防士が森林火災に立ち向かう、その科学的なアプローチと戦略に非常に感銘を受けました。それは、「火災が発生する」その段階の現象をターゲットにするのです。ヘリコプターを使って、24時間体制で監視体制を敷き、見張りのネットワークを密にして、森林での最初の煙を発見しようと努めます。さて、なぜ、消防士の話などをして、横道にそれたかをこれからお話しいたします。それは、原子力分野で行われていないこととの違いを皆さんにお見せするためです。というのも、フランスでは現在58基の古い原子炉が稼働していますが、国が森林火災に関してフランスの消防士に与えている知識や手段に類似したものは、将来起こるかもしれない原発大事故の危険については何一つ存在しないからです。教育レベルが高いプロである消防士学校の学生と数日間話しているうちに、私には次のことがわかりました。それは、チェルノブイリのような大事故があれば第一線で働くことになるこのフランスの消防隊は、このたった一回限りの仕事は何をもたらすことになるのか何も知らないということです。私は、ベラルーシの汚染地域で行われた犯罪について学生たちに話しをしました、モルモットにされた人々のこと、核分野における防護評価研究センター(CEPN), エートス、ムタディスコンサルタントなどフランスの専門家たちが、健康被害が増え続ける貧しいベラルーシの「現場を占領」しにやってきたことを話しました。また、その専門家たちが、現地の研究者を支援するどころか彼らを追放して、ただデータだけを取りに来たことも、また予防措置が被ばくした子供にとっては有効にもかかわらず、それを拒否したことも話しました。独立した立場からの科学調査に対して、国連の安全保障理事会の常任理事国及び原子力と健康に関する国連の専門機関が検閲と妨害をしていることも話しました。目の前にいた消防士たちは、まず最初に召集される事故処理要員であり、いうなればソ連のリクビダートルに値するのですが、その彼らに対して、「無知という戦略」と「国連機構の犯罪」について詳しく話しをしました。国連は、体内の低線量ひばくが健康に影響を与えることを隠べいし、80万人の事故処理作業員リクビダートルの集団を疫学的調査から排除しているのです。彼らは、チェルノブイリ原発の核爆発を食い止め、ヨーロッパを救ってくれたにもかかわらずです。キエフ会議では、IAEAに所属する高官であるゴンサーレス氏が次のように言明したことを皆さんは映画の中で見たと思います。「低レベルの放射能があるからといって、放射能と病気の因果関係の証拠とすることはできない。それは、解決不能な「認識論上の問題だ」と言いました。ゴンサーレス氏は「このレベルにおいては、直接に知識を得るいかなる手段も持っていません。私たちは知らないのです」と言いました。一方、ユーリ・バンダジェフスキー教授は、ゴメリ医科大学を創設した人物ですが、9年もの間厳密な科学研究を行い、無知を徹底的に糾弾したために、投獄され、亡命せざるを得なかったのですが、これは既に私たちの知るところであります。バンダジェフスキーは、相関関係を発見し、汚染された食品を通して体内に吸収された低線量の放射性セシウム137と生命維持に欠かすことの出来ない臓器の破壊の間には因果関係があることを立証しました。国家元首が医者や物理学者でなければいけないということではありません。責任ある国家元首は専門家から原子力について助言を受け、情報を与えてもらえばいいのです。フランスの場合は、それが原子力ロビーであり、その事実のために、まったく科学的信憑性を欠いてしまっています。核分野における防護評価研究センター(CEPN)は1901年の法律によればNGOになりますが、そのメンバーはたった4名しかいません。しかし、そのメンバーは皆非常に強力です。フランス電力EDF, 現在はアレヴァとなっているコジェマ、フランス原子力・代替エネルギー庁CEA、それとフランス放射線防護・核安全研究所IRSNがメンバーです。エートスは、CEPNという核分野における防護評価研究センターから出てきた組織で、CEPN自体はフランス電力とフランス原子力・代替エネルギー庁CEAによって創設され、それにのちにアレヴァ社の前身であるCOGEMAが加わるようになります。つまり、エートスとは、フランスの原子力ロビー勢力の寄せ集めにほかならないのです。また、エートスには重大な欠陥がありました。それは、エートスがフランス原子力ロビーによるプログラムだったために、健康面に全く介入できないという如何ともしがたい限界があったことです。つまり、エートスは住民の健康を扱う権限を持っていなかったのです。このように、エートスは、原子力推進国家と原子力ロビーから政治的にも財政的にも支援を受け、見かけ上は、被ばくした人々を人道的に援助するふりをしていたものの、実のところ、ネステレンコやバンダジェフスキーのような独立した立場にある科学者が、多くの妨害にもかかわらず明らかにしていた健康上の膨大な被害を認める上での大きな障害となっていたのです。健康への危険は最小限とされ、被ばくした子供たちは、モルモットになり、手つかずの状態で見守れる純粋な生体として残されました。というのも、吸着剤ペクチンを使って体内の放射性核種の量を下げなかったからです。エートスとそれに続くコール・プログラムが、ペクチンのための資金提供を拒否したのです。このように、フランスの原子力ロビーは、商業的利益と結びついた立場にあり、医療分野では失格であるにもかかわらず、営利目的を持たないNGOという隠れ蓑を使って、フランス原子力安全機構ASNに対して、チェルノブイリ事故の被害と放射線防護に関する情報を与えています。この閉じた連環は、SAGEプログラムの国際刊行誌にもあらわれています。SAGEというプログラム「原発事故続く長期間の被ばくにおいてヨーロッパで実践的放射線防護文化を発展させるための戦略」という表現の頭文字だけとった名前のプログラムは、核分野における防護評価研究センター(CEPN)とムタディスコンサルタントがいともかわらず共同で遂行していましたが、学際的な国際プログラムが結実したものです。これには、ヴァシーリ・ネステレンコも参加していました。ヴァシーリ・ネステレンコは、国際レベルの物理学者であり、チェルノブイリ事故の際、初期段階でリクビダートルとして参加しました。また放射線防護の専門家でもあり、ベラルーシの土壤汚染にも精通している人物です。ネステレンコは、他の四人の外国人執筆者と同様、SAGEプログラムの国際刊行誌に論文を書きました。

ホール・ボディー・カウンターを使った測定、ペクチンを使った治療、子供や両親、教育者への情報適用などを綴ったネステレンコの放射線防護対策は、SAGEプロジェクトに採用されると言われていました。また、その業績を讃えて25000ユーロの資金援助が受けられること、その費用でプロジェクト協力者であり生体学者であるネステレンコの息子とともにパリの会合にも来られることなどを、核分野における防護評価研究センター(CEPN)からネステレンコは、お墨付きをもらっていました。ところが、ネステレンコの論文は、まったく掲載されなかったのです。掲載されたのは、ただ食品汚染の「許容レベル」の表だけで、これは、ベラルーシの保健省からセンターが簡単に入手できるような代物です。

私は、ネステレンコが結論としてあげた推奨対策で、ジャック・ロシャールが検閲しカットした対策をここでお話ししたいと思います。1.放射能事故の際、原発から300-500km圏内に住む住民にとってより有効な防護策としては、ヨウ素剤をそれぞれの家庭に常備しておくことが不可欠である。ヨウ素剤は定期的に交換されなければいけない。また、原発事故後の最初の数時間はヨウ素剤を使って予防を行わなければならない。2.原発を保有する国もしくは、原発が近隣にある国では、あらかじめ環境及び食品の放射線管理システムを作ることが不可欠である。3.原発周辺では、100km圏内に、自動放射線検査システムを創設し、放射線の危険が生じた際は放射線防護対策について直ちに住民に対して情報を発信しなければならない。4.ヨーロッパのすべての国において、あらかじめ以下のことがなされている必要がある。

第一に、食品放射能検査を政府レベルでシステムとして立ち上げる必要がある。それと同時に非政府レベルの食品放射能検査センターも必要である。

第二に、ホール・ボディ・カウンターを備えた可動式または固定式のラボのネットワークが必要である。これは、セシウム137が住民、とりわけ子供たちの体内にどれだけ集積しているかを調べるための装置で、住民の様々な社会層を選んで調査するために必要なシステムである。

エートスとチェルトコフ

エートスとチェルトコフ

に
第三に、被ばくした人々の体内にある放射性核種を除去するために、食品サプリメントを備蓄することが必要である。

第四に、放射能で低レベルに汚染された土地で、汚染されていない農作物を収穫するために、技術を使って農工業生産を可能にするような法規を定める。

五番目として、1986年から88年までオーストリアで行われていたような農生産物の許容汚染レベルを定めるダイナミックなシステムがあらかじめ必要である。

今言ったことは、チェルノブイリで体験したような大きな原発事故の実態に対応するための基本的な推奨対策です。

しかし、ネステレンコは次のように書いています。「長期間にわたる事故後管理の戦略としてでも、またそれだけのためにでも、あらかじめ準備を整えておかなければならない。大きな事故が起こる前に行動をしなければならない。そのために、被害処理のネットワークを作る必要がある。何百万の住民が訓練を受けた事故処理班の助けを必要とすることになるかもしれないのだ。」これは、まさに「火災が発生しつつある」対策としてフランスが実行できたことです。私の知る限り、このような対策は、原発事故の起こりうる結果に対してまったく存在していません。1998年にヴァシーリ・ネステレンコに初めてインタビューした際、彼は私たちに次のように言いました。「原発保有国は、チェルノブイリの事故から何も教訓を得ていないように思います。私は、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカに行き、それぞれの国で原発を見学しました。そこでは皆がこう言います「すべてうまくいっていますよ、チェルノブイリの問題はチェルノブイリの原発のせいですよ」。イギリスやフランスなどの国々の防護対策はすべて、原発の周囲20-30km圏内に住む人たちを対象にしかしていないんですよ」これでネステレンコの発言の引用を終わります。

私の話を聞いていた消防士の何人かは、今見て聞いたことに明らかにショックを受けているようでした。私は、自分でよしとはしませんが、この分野では「孤独な伝道者」の熱情を持っていることを自分自身わかっています。哲学者ポール・ヴァレリーは冷静に次のように言っていますが、まさにそのとおりです。「他の人々が私と同じ意見をもつということを望むには、私は値しない人間だ。熱心に人々を勧誘する行動をみて私は驚く」しかし、嘘を前にして、それが事実であって単なる意見ではない場合、しかも、そのせいでこの瞬間にも深刻な被害を出し続けていると言うのに、いったいどうすればいいのでしょうか？映画『真実はどこに?』の中でバンダジェフスキーは「私たちの子供たちは死んでいるんですよ」と声をあげていました。

**Wladimir Tchertkoff**

エートスとチェルトコフ

エートスとチェルトコフ